

ルーシ問題について

熊野 聰

九一一世紀のロシア、ビザンツ、アラビアの史料にルーシ *Рус* または *ロース* *Ros* とよばれる人々または地方があらわれる。一般にルーシはロシアの古名と考えてよいのであるが、この時代については、ロシア最古の年代記（いわゆるネストールの年代記）のルーシ起源に関する叙述をめぐって二〇〇年以上にわたる論争が続いている。一方はルーシはスウェーデン人とするものでノルマン説とよばれ、他方はルーシはスラブ人とするものでスラブ説とよばれる。この研究ノートは、当時のスウェーデン人の遠隔地貿易を研究する必要上、ネストールの年代記によってルーシを解釈する試みである。なおビザンツ、アラビア及び西欧の史料から、ルーシが全くノルマン人として解釈される場合が多くあるのであるが、ここではそれを一切除外してロシア年代記だけから考えてみたい。

その冒頭の文句から *Повесть временных лет* とよばれる最古の年代記は、完成された形では一一二二年、キエフ・ペチェルスキ修道院の僧ネストールによって編集されたといわれるが、もっとも古い部分はずでに一〇三九年にまとめられていた

らしい。以下に必要な部分を抜き書きする。⁽¹⁾

(1) 「これはルーシの国がどこから始まったか、誰がキエフにおいて最初に君臨し始めたか、しかしてルーシの国がいかにしてつくられたか、という過ぎし歳月の物語である。」

(2) 「大洪水の後ノアの三人の子らは土地をおのれ達の間に分けた。……ヤベテの部分にはルーシ、チュージ、ヴェーシ……が居住している。……ヴァリヤーク、スウェーデン人、ノルマン人、ゴート人、ルーシ人、アングル人……その他もヤベテの支族である。」

(3) 「(スロヴェン人の一つポリヤーニンについて述べ) 三人の兄弟があり、一人の名はキー、二番目は……しかしておのれの長兄の名において小きき町をうち建て、この町にキエフという名を与えた。……彼らの後《をうけて》ポリヤーニン族は今日に至るまでキエフにいたのである。……これらの兄弟の後をうけて、彼らの氏族がポリヤーニン族の間で統治を始めた。」

(4) 「ルーシにおけるスロヴェン民族は次のものだけである。ポリヤーニン族、ドレヴニヤニン族、ノヴゴロド族……」

(5) 「またルーシに貢物を納める民族は次のようである。チュージ、メーリヤ、ヴェーシ、ムーロマ……」

(6) 「これらの兄弟の死後多くの年月をへて、……(コザール人が納貢を迫り、ポリヤーニンは彼らに剣を与えると、コザールの長老達はそれを見て、コザールはポリヤーニンに支配されるだろうと予言する) ……すべてこのことは実現した。……コザール人をルーシの諸侯は今日の日に至るまで領有しているの

である。」

(7) 「ミハイルが統治し始めた第一五インダクトの六三六〇年（西歴八五二年）にルーシの地はその名をよばれ始めた。このことが知れたのは、この皇帝の時にルーシがツァリグラードに攻めいったからで、それがギリシアの年代記に書かれているのである。」

(8) 「それ故ここから始めて、数（年）を記そう。」

アダムから大洪水まで……………二二四二年

(中略)

コンスタンチンからこのミハイル〔皇帝〕まで…五四二年

ミハイルの第一年からルーシの侯オレーグの第

一年まで……………二九年

オレーグの第一年、彼がキエフに坐してからイ

ーゴリの第一年まで……………三一年

(後略)

(9) 「(八五九年) ヴァリャーグ人が、海の彼方から来ては、

チュージ、スロヴェン、メリリヤ、ヴェーシ及びクリヴィチ

《の諸族》から貢物を取った。」

(10) (八六二年、前記の諸族は) ヴァリャーグ人を海の彼方に

追い払い、彼らに貢物を納めず、自らおのれを領し始めた。…

…(すると内乱状態になったので、海の彼方に統治者を求め、

ヴァリャーグのもとに赴いた) ……これらのヴァリャーグ人は

ルーシとよばれた。……三人の兄弟がおのれの氏族と共に来る

ことを申し出で、ルーシ全部をひきつれて、スロヴェンのもと

に來り、長兄リユーリックはノヴゴロドに、次兄シネウスはベ

ロオーゼロに、末弟トルヴォルはイズボルスクに居を占めた。

しかしこれらのヴァリャーグ人からしてノヴゴロドはルーシ

の地とよばれたのである。(異本によればリユーリックははじめ

ラドガに居を占め、二人の弟の死後ノヴゴロドの町を建て

た。同異本によれば「しかしこれらのヴァリャーグ人からル

ーシの地はその名を得た。)」

(11) 「彼に二人の家来があり、彼の氏族のものではなかった

が、貴族であった。しかし彼らはおのれの氏族と共に、ツァ

リグラードへ行くことを乞うて叶えられた。ドニエプル河に沿

うて出発し、傍を通りつつ山の上に小さき町を見て、訊ねて言

った、『これは誰の町か?』と。彼らは答えて言った、『キー、

シチェーク及びホーリフの三人の兄弟があり、かつてこの町を

つくったが、死んでしまった。しかし我らは彼らの氏族のも

ので、コザール人に貢物を払いつつ、暮しているのである』と。

アスコリドとヂールは、多くのヴァリャーグ人を集めて、この

町に残り、ポリャーニンの土地を領し始めた。一方リユーリッ

クはノヴゴロドに君臨していた。」

(12) 「(八六六年、アスコリドとヂールのギリシア遠征) ……

神を信じぬルーシの人々。」

(13) 「(八七九年) リユーリックが死んだ。政事はその一族の

オレーグに渡し、彼にその子イーゴリを委ねた。イーゴリは極

めて年少だったのである。」

てアスコリドとチールをおびきだし、彼らに言う。『汝らは侯でもなく、侯の一族でもない。しかるに我らは侯の一族である』、しかししてイーゴリを出して、『しかししてこれはリユーリックの子である』と。アスコリドとチールを殺し、……オレーグはキエフにとどまって君臨し、かく言った。『この町をしてルーシの町々の母たらしめよ』と。

(15) 「しかしして彼のもとにヴァリヤグ人及びスロヴェン族その他があり、ルーシの名をもってよばれたのである。」

(16) 「(オレーグは)ノヴゴロドのヴァリヤグ人に平和確保のために年に三百グリヴナの貢物を与えることを定めた。」

(17) 「今ルーシとよばれているポリヤニン。」

(18) 「パウロはまたスロヴェンの種族の教師でもあるのである。この種族から我らルーシも出たのである。」

(19) 「(九〇三年)イーゴリのためにアレスコフ(アスコフ)から名をオリガという妻をつれ来った。」

(20) 「更にルーシの町々、第一にキエフ、またチエルニゴフ及びベレヤストラブリ、ポロツク、ロストフ、リユーベツチ並びにその他の町々……これらの町々にはオレーグの権力の下に大侯が坐していたのである。」

(21) 「(九四五年、イーゴリの死)……一方オリガはその子なる幼きスヴァトスラフと共にキエフに在った。」

(22) 「(九五五年、ビザンツ皇帝コンスタンチンはオリガの)容貌が極めて美しいのを見、……彼女に言った、『汝をわが妻としたく思う』と。」

ノルマン説は(10)から来ている。北西ロシアの諸族が自分達の

支配者としてヴァリヤグ人の一派ルーシをよび、そこからノヴゴロドがルーシの地とよばれ、後オレーグがキエフ侯となつたのでキエフがルーシの地になつた。しかしこれについては年代記自体が矛盾している。(7)によれば八五二年、すでにルーシとよばれている。しかしヴァリヤグ人の一派としてのルーシ

が海の彼方から来たのは八六二年、(12)によればこの意味でのルーシがギリシアを攻撃したのは八六六年である。(2)においては一つの文章中にルーシという用語が二様にあらわれる。第一はスロヴェン人の総称として、第二はヴァリヤグ人の一派として。

(4)と(5)は支配・被支配の關係の中でルーシがあらわれるが、「ルーシにおけるスロヴェン人」はすべてのスロヴェン人を含んではない。つまりルーシはヴァリヤグにせよスラブにせよ、民族的概念とはかならずしも一致しないのである。

(10)から明らかなように、年代記作者の時代にはルーシはキエフのスラブ人 \parallel ポリヤニンであった。また(6)の、かつてコザールにポリヤニンが納貢し、今はその逆にルーシがコザールを支配しているという叙述からもルーシ \parallel ポリヤニンという式がでてくる。

冒頭の(1)は三つの部分にわかれるが、第一と第三の部分ではルーシの地が云々されているのに対し、第二の部分では「誰がキエフにおいて最初に君臨し始めたか」となっていて「ルーシにおいて」となっていない。これはルーシがキエフと内容的に

等置されることを示すと同時に、この二つの言葉が同義語ではないことも示している。この問題には後に立ち戻る。(3)と(4)から、キエフにおける古いポリャーニンの族長キーとその氏族の支配の正統性が暗示され、この系統はアスコリドとザールの時代まで続いたらしい。しかしこの支配系統の断絶に作者は関心を示さず、したがって(1)の「キエフにおける君臨」がキーを指しているのではないことは明らかである。しかし作者の関心はルーリック家そのものにあるわけでもない。(8)の編年表から知れるように、年代記作者自身によればルーシをかくよばしめ、ルーシの支配をはじめた最初の行動であるはずのルーリックの業績は、彼にとって時代区分のメルクマールとなる価値のないものらしい。彼はルーシの最初の侯としてオレーグを考えており、しかも「オレーグの第一年」はルーリックの死んだ八七九年でなく、「キエフに坐した時」であるから、作者がルーリックを時代区分に使わないのは彼がノヴゴロドに居てキエフに来なかったからだとして考えられない。したがって作者の関心は、ベチエールスキ修道院の保護者であるキエフ侯家としてのルーリック家にあったことになる。それにしても、ルーリック家を問題にするなら、キエフに来なかったというだけでルーリックを軽視することは理解できない。

次にオリガの年齢に疑問がある。(13)(14)からイーゴリは、八七九年に少なくとも満〇歳、九〇三年にオルガと結婚した時少なくとも二四歳、死んだ時六六歳。オリガは結婚時満一〇歳と仮定してさえイーゴリの死んだ時五二歳で、その子スヴァトス

ラフは幼なかつた。さらに22九五五年、オリガ少なくとも六二歳の時、ビザンツ皇帝から「容貌が極めて美しい」ので求婚されている。イーゴリとオリガの年齢はもっと少なくてしかるべきである。イーゴリの詳しく述べられている最初の業績は九四一年のギリシア遠征であり、九一三年にオレーグの後をついでから、九一四、九一五、九二〇年にそれぞれ簡単な事実が記されているのみで、実に二一年間は空白である。おそらくイーゴリはオレーグの死んだ頃ごく幼少だったのでないか。そうするとルーリックとの血縁関係、オリガとの結婚の年代は、年代記作者の創作ということになる。問題はなぜ彼がイーゴリをルーリックの子としてえがきたかったか、ということである。これに満足のゆく答を与える仮説は、年代記作者の任務は彼の時代のキエフ侯の正統性をうちたてることであつた、とすることである。

キエフのスラブ人ルーリャーニンの支配は(i)キーの家系、(ii)アスコリドとザール、(iii)オレーグ、(iv)イーゴリの家系、の四つにわけられる。これらの相互関係は(i)と(ii)の交代は流血を伴わず、またポリャーニンのコザールへの従属の終りと結びついている。(ii)と(iii)の交代は前者の後者による殺害という形をとり、(iii)と(iv)は連続的である。

(ii)によればアスコリドとザールはルーリックの家来であるが彼の氏族のものではない。そして(4)ではオレーグ・イーゴリの方が彼らよりも正統性をもつことが述べられ、それが前者による後者の殺害の正当性の根拠とされている。だがどうしてオレ

ীগは彼ら二人を殺す必要性があったのか。オレーグの(Ⅳ)におけるせりふに現実的な重みがあったとすれば、彼ら二人はイーゴリの養育者としてのオレーグに従ったにちがいない。ここではその試みさえされずいきなり計略で殺されている。ここには事実とその事実を合法化する創作とがある。一つは(ii)が(iii)に流血をもってとってかわられたこと、他は両者がルーリックに対する一定の関係をもっており、その関係において(iii)がより正統であるということ、である。後者が事実であれば前者を創作する必要はない。前者が事実であれば、この支配権篡奪を正当化するためには後者の創作が役に立つ。

(Ⅲ)によればアスコリドとヂールはルーリックがノヴゴロド(又はラドガ)に來た年にドニエブルを下ってキエフの支配者となった。これは早すぎる。(Ⅳ)では、八六六年に彼がコンスタンチノープルを襲った時、ルーシとよばれている。これはギリシアの史料によれば八六〇年のことである。(Ⅴ)ヂールの名はアラビアの文献にも知られている(Ⅵ)である。つまり八六〇年ころにはキエフにルーシという人々がいてその支配者にアスコリドとヂールという人物がいたことは動かさない事実である。

スラブ人の一部族ポリャーニンがキエフに定着し、その中の一氏族がポリャーニン全体を統治する侯をだしていた(i)。遅くとも九世紀の中頃には別の氏族に支配権が移った。この権力移転は年代記の暗示するところでは流血を伴っていない。おそらくポリャーニンがコザールへの従属から脱する過程であらわれた指導者であるこの新しい支配家系(ii)はしたがって、(i)と

はちがうにもかかわらず、キエフの人々から正統とみなされたと思われる。ところが年代記作者の時代のキエフ侯の家系(iv)は(ii)から流血をもって支配権を奪ったもの(iii)から権力をひきついでるのであって、正統とはみなせぬものである。年代記作者の使命はこのキエフ侯の支配を正当化することであった。そこで彼は(ii)と(iii)を共通の、しかし後者が正統の、一つの出身であるかの如く、当時おそらく存在したルーリック伝説と結合させて創作したと考えられる。

次に問題となるのは、オレーグがキエフ侯となるに際してのヴァリャーグ人の役割である。西欧の言語学者はオレーグ(Oleg)は北欧の *Helgi* であると(Ⅶ)う。ソ連邦でもこれに対する科学的な反論はなく、例えばアカデミー版の世界史でも、彼は疑いもなくヴァリャーグであった、と述べられている。一世紀のキエフ侯の真の先祖であるイーゴリとこのオレーグの関係については二つのケースが想定される。一つは西欧の歴史家がそうしているように、イーゴリもオレーグも共にヴァリャーグの頭目である場合、もう一つはオレーグはヴァリャーグの頭目であるがイーゴリはポリャーニンの中の一氏族長である場合、である。第一の場合、オレーグをことさらイーゴリの下のものとする必要がない。オレーグの一族のイーゴリが後を継いだ、といえはすむはずである。第二の場合がしたがって可能性が高いわけであるが、この場合ヴァリャーグ人はポリャーニン族長の傭兵ということになる。

多くの西欧の学者は傭兵説をいく分かとり入れながら、しか

し単なる傭兵にとどまらず支配者に転化したと主張する。しかし(16)の叙述は、オレーグが実際にヴァリヤークだったとしても、ヴァリヤークの利益で行動する独立したヴァリヤークではなく、キエフの支配者としてポリャーニン⁽¹⁷⁾の論理で行動していること、つまりオレーグ個人の出身のいかんにかかわらず、すでにキエフは構造的支配機構を備えていたことを示している。その意味でいかにヴァリヤークが重要であったにしてもそれはキエフの軍事力としてにすぎない。

(15)「彼(オレーグ)のもとにヴァリヤーク人及びスロヴエン族(ノヴゴロド族)その他があり、ルーシの名をもつてよばれた」という文章は、キエフがルーシとよばれたのは、まず第一にヴァリヤーク人の一派ルーシ族がノヴゴロドを支配し、それが次いでキエフを占領したからではなく、反対に、キエフが本来ルーシの名と結びついており、その権力争奪戦の過程で、イゴリの家系がアスコリドとヂールをうち破るためにヴァリヤークを含む北方の諸族の助力を求め、彼らを親衛隊としたために、彼ら自身もルーシとよばれるに至った、ということを示してはいないだろうか。

しかしまたこのことから、キエフとルーシの語は結びついてはいるが同義語ではないということがでてくる。キエフの新しい支配者の軍事力が北方の非ポリャーニン人である場合、彼らがルーシとよばれても、それがキエフ人という意味をもつことはありえない。つまりルーシという用語は疑いもなくキエフと結びついているが、しかし地理的概念ではない。そこではじめ

の問題に戻るのであるが、(1)において「誰がルーシにおいて最初に君臨し始めたか」ではなく「キエフにおいて」と述べられているのはなぜか。それは「ルーシ」がそこにおいて君臨を云すべき性質の用語ではないからである。すなわちルーシは地理的概念ではない。又すでに述べたようにルーシは民族の概念ともかならずしも一致しない。にもかかわらずルーシはキエフとポリャーニンに結びついている。この問題の解決は次の仮説によるしかない。すなわち「ルーシ」は政治的概念であり、支配的な社会層と結びついていた。ルーシは第一にポリャーニンの支配層であり、ポリャーニンが他部族を支配すればその全領域がルーシの地とよばれ、キエフの権力の軍事力が非ポリャーニン人であれば、軍事力がまだ侯の私兵であった段階では、彼らもルーシとよばれるのである。(18)の「ルーシの町々」が「オレーグの権力下に大侯が坐して」いる町々であるという叙述もこれを示すものである。

さらにヴァリヤークのロシア進出の度合、ロシア年代記以外の史料、とくに冒頭に記したようにルーシをノルマン人を指すものとして用いている史料、言語学・考古学による論拠などについても論及すべきであるが、紙数もつきたので次の機会にゆずりたい。

(1) 除村吉太郎氏訳『ロシア年代記』による。ただし漢字と仮名は当用に変えている。

(2) 例えばクリヴィチ、白きホルヴァト人、これらは後にルーシに含まれる。

- (3) cf. Henryk Paszkiewicz, *The Origin of Russia*, London, 1954, pp. 150-151.
(4) 藤村吉太郎氏訳『ロマン年代記』p. 674.
(5) *Geschichte der Kultur der alten Rus'*, Berlin, 1939, Bd. I, W. W. Mawrodin, "Einleitung," p. 5.

- (6) Vilhelm Thomsen, *The Relations between Ancient Russia and Scandinavia and the Origin of the Russian State*, Oxford, 1876, pp. 68-72.
(7) (滋賀大学経済学部助手)